

---

# サチ子の日記

土壙 友

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サチ子の日記

### 【著者名】

土壇 友

### 【あらすじ】

静男は義妹と浮氣しようとする。

静男は春代と夜空を見上げていた。

「ほら、流星群よ。見えるかしら」

春代は夜空を指差して、興奮したように話し掛ける。静男は寄り添いながら、

「美しか。星が降る、まさに星が降つてるとしかいいうがない」

と、その指さす方角を見つめた。北東天の一角であった。

「ペルセウス座流星群っていうのよ。お盆の時期に観る」とができるの

「おはるちゃんは星のこと、詳しいね」

「それほどでもないけど」

春代は、お星様はいつも観ているの、願かけしているから、と言つて両手を合わせた。去年の八月のことである。

深夜零時を回つてもふたりは夜空を眺めていた。

年も改まり正月の一日前、静男は一人でこたつに入つていた。暮れから正月にかけて到来した寒波。山から吹き下ろす風は冷たく、その寒さはやはり骨身にこたえる。

妻の秋子と三歳になる息子は、電車で三十分ほど離れた妻の実家に帰つており、静男が常々狭いと感じていた六畳の居間も、こうして一人つきりで居ると意外と広く見える。実に寒々として、わびしいものである。

静男は新しい作品の構想を練つていたが、どうも落ち着かず、以前書き溜めておいた自分の作品に目をやつていた。短編小説風に書いたものを、ある程度まとめて、全集という形で世に送り出せないものかなどと、大雑把であるが、そんなことを考えていた。

静男は小説家であるが、その仕事ぶりは芳しくなく、収入は細く、かんぱ

生活は苦しかった。

それに引き換え、静男の実家は代々続く漁師の網元で、船もたくさん持っている資産家である。父母は高齢であり、歳の離れた長兄、作蔵が上柳の家督を相続していた。

静男は独身時代から生活の全てを実家に依存しており、その癖は結婚した今でも少しも変わっていない。秋子にはそれが不満であった。静男の実家には、ほとんど顔を出さず、自分の実家に帰つては静男の不甲斐なさを嘆いている。

元々静男にはサチ子という恋人がいたが、秋子と三角関係になり、ふとしたばずみに過ちを犯した秋子は、静男の子を身籠つた。サチ子は静男の元を去り、戦いに勝利した秋子は静男と結婚したのである。

秋子は理知的で、勝気な性格である。学生時代は静男の才能に惚れこみ、いつかは有名な作家になると信じていたが、時が経つにつれてその期待は裏切られ、現実は抜き差しならない状況になつていた。  
他人に自慢のできる夫、私は作家夫人よ。そのようなブランドを手に入れるという夢が破れ、静男に対する愛情も急速に薄れていった。

山の手にある秋子の実家には、母と妹の春代が暮らしていた。何かと口実を付けて実家に帰る秋子に、母は「しつかり嫁勤めしない」と小言をいつてはいるが、内心秋子が歸つてくることを、心楽しみにしている。

その反面、静男の家では秋子が実家に帰るたびに、入れ替わるよう、妹の春代が遊びに来ていた。

空はどんよりとして雨雲が立ちこめ、昼といつのご夕暮れのよつな暗さである。

静男はぼんやりと、窓から外の景色を眺めていた。  
お昼も過ぎた。いつもならもつ来るところだが

柱時計に田をやると、人の気配がして玄関の開く音が聞こえた。

「おめでとうございます。静男義兄さん、居ますか？」

春代の明るい声が響いた。彼女は玄関先でコートを脱ぐと、そのまま居間にあがってきた。フリルのついた白いブラウスの上に、オレンジ色のカーディガンを羽織った清楚な装いである。

静男はウロウロと落ち着かず、立つたり座つたりしていた。玄関まで出迎えることは、いかにも「お待ちしていました」と言わんばかりで、こたさか照れくさかったのである。

ぶつきらぼうじ、「おめでとう」と言った。

春代は「コシ」と笑つてこたつに入ってきた。

「静男さんは、うお座ですね。私調べたの」

「星占いですか。それで、どうでした?」

「何でもないです。秘密ですよ」

春代は意味ありげな笑みを浮かべ、ミカンの皮を剥き始めた。静男は腹が減つて何か食べたいと思つた。

「あ　そうだ、おはるちゃん。正月だから一杯やりたいね　」

「そうね、まついいか。一本だけですよ」

春代は慣れた手つきで冷蔵庫からおせちの詰まつたお重を取り出し、いたつの上に手際よく並べた。料理の苦手な秋子の代役で、何度も上柳の台所に立つた春代には、ビニに何があるかは、おおよそ見当がついていた。

「ハイ、おひとつどうぞ」

電子レンジで燶かんをつけた徳利の首をつまんで、静男の横に座つた。

酒は恋の媚薬である。その匂いは甘く強い。女の香りはその裏に隠れるのであった。

「辛口のお酒はアツアツでないとダメよ。それに盃さかずきはグイ飲みでしょ。これは満杯いっぽいにしてはだめね。

半分ぐらい注いで冷めないうちに一気に飲み干しますの。ぐいっとね、わかります?」

春代は姉さん女房を気取つて、七分田ほど酒を注いだ。「あ　ここ、おはるちゃんのお酌で、よけいうまこよ

酒を飲み干す静男の喉元が、グビッと鳴った。

「おはるちゃんも一杯いこいつ」

「ハ、ダメヨ。でも、一杯だけならいただこうかしら」

春代は半分ほど注がれた盃を、一度に分けて飲み干した。

「ほう、なかなかかけるね」

「つふふ。はい、お返します」

「はいはい、どうもどうも。さて、どれがいいかな。黒豆でもつまむかね。それともエビ、いやいや牛肉の巻いたのがいかつべかな」

「やだ、変な茨城弁。静男さんのお国はどこなの」

「まあ、堅いことは言わず。もう一杯、どう?」

「あら、わたしを酔わしてビリする気かしり」

「なんでも、何でもなかとよ」

「ウソ、男の人は単純だから、考えていることはすぐわかるわ」

「俺が考えていること、本当に分かる?」

「そうね、静男さんはわたしが好き。 でしょ」

「それはないね。大人をからかってはいけません」

「あら、わたしも大人でござります。赤ちゃんを産む」とだつて、

「できますわ」

静男は困つて、おどけたタコ踊りで春代を笑わせた。

「なに? それ

「タコです」

「うふ、馬鹿ね。面白くないわ」

庭に目を移すと、二つの間にか雨がしょぼしょぼと降り始めている。

残った酒を飲み干すと、静男は酒臭いため息をついた。

「つお座は、アンドロメダ座と、くじら座の間に横たわる大きな星座です。でも、残念なことに、明るい星がありません」

春代の黒目は、一回り大きくなる。「どのような形か、知っていますか」、と星座を語る彼女の瞳は、生き生きとして輝くのであった。

「つお座の形かい。わ、イメージとしては、魚だよね」

「そう、魚ですよね。一匹の魚が、りぼんで繋がれているのです」

静男はさびしがり屋である。

人間関係は煩わしいと思うが、一人では、萎えてしまつ。

魚が一匹いるということは、訳もなくうれしかった。

「一匹の魚は美の女神『アフロディテ』と、愛の神『エロス』です」「ギリシャ神話かな？」エロスって聞いたことあるけど。アフロディテって？

「美の女神でしょ、ヴィーナスのことですよ。エロスはアフロディテの息子です」

「あつそう。知らなかつたな。で、ナンデ二人は魚になつたの」「怪物に追われて、魚に変身して逃げたのです。離ればなれにならないように、二人はお互いの体をリボンで結んだの」

それからナイル川に飛び込んで逃げたのだと、春代はこたつから出ると、得意げに両手を水平に広げ、静男の前でひと回りした。

スカートが、から傘のように回り開いた。

「こんなふうにナイル川に飛び込んだの」

春代の肉体は成熟していた。

ふくよかな胸に、ヴィーナスか」と、静男はひとり、呟いた。

「うお座生まれの人は、『精神的な愛』と、『肉体的な愛』の両方を兼ね備えている。愛を惜しみなく『える』ことと、愛を限りなく奪うことと、同時にできる人なのね」

「一重人格、いや、ちょっと違うな。よりアフロディティに傾けば、『える愛・エロスに傾けば、奪う愛』といふことか」

「その不安定さが魅力なの。うお座の守護星は、海の神『海王星』よ。大海原のような包容力があるの」

「母なる海だね。俺、海って、大好きさ」

「星座が与えた『愛の一重性』と、守護星が授けた『包容力』で、この星座生まれの人は、神秘的な直観力を持った、ロマンティストなのですよ」

「えー、この俺が？　信じられない」

静男さんは少くすことに歓びを感じる、うお座の男なのね。女にとつては、危険な誘惑者かしら、と春代は笑つた。

ひとしきり降つて上がった雨が、又強く降つてきた。

静男は深く酔っていた。

トイレに立とうとした静男が少しよろめくと、春代は「あ、あぶない」と、素早く静男の脇に肩を入れた。春代の甘い香りが、麻酔薬のように静男の脳をしびれさせる。

静男は春代を抱きしめたくなる衝動に駆られたが、理性がからうじてそれを押し止めた。

「トイレまで行く？」

「いや、いい。自分で行く」

静男は己の心を見透かされることを恐れ、意地になつてひとりでトイレに行つた。

静けさの中で、窓をたたく強い雨音に、静男の記憶が蘇つてくる。あの日も、こんな雨だつたな

秋子と結婚を話したその日も、雨であった。

秋子は窓の外を眺めながら、春代との秘密を打ち明けた。

「お春は双生児でした。ふたりとも、幼い時、生きるか死ぬかの大病を患つたのです。そして……」

奇跡的にお春は生き残つた、と秋子は話を続けた。

「そんな彼女が不憫で、私はお春を守つてあげました。

お春は私になつて、いつも私の後を付いてきました。私を頼りにしていましたのですね。

ところが、いつの頃からか、お春は私のものを欲しがるようになり、終<sup>しま</sup>には、全部取らないと気が済まなくなつたのです。

それから私は、お春と距離を置くようになり、今では冷たい姉になつてしましました

たつた二人きりの姉妹なのに、因果な話ですね、と秋子はため息を吐いたのであった。



静男は台所に立つ春代を見つめていた。

台所からは、まな板をたたく小気味よい音が聞こえてくる。春代には確かに我が強く、独占欲のようなものがある。しかしそれは、よほど注意深く観察しなければ気付かないほどのものである。と、静男は感じていた。

「ウフ、なに見てているの？　わたしの顔に何か付いている？」

春代はたくあんを小皿に盛つて、こたつに入つた。

「姉妹か？」

「え、なに？」

「いや、独り言さ。お春ちゃんは美人だね」「

「バカ、おかしなひとね」

静男は盃を傾けた。冷めた酒がゆるやかに喉を刺激する。

春代の言動は普通の人と変わらない。むしろ天の衣あまのいぬきをまとい、松林を舞い踊るような優雅な立ち振舞いなどは、とても常人の及ぶところではない。

降る雨音が生活の雑音を消し去り、部屋には奇妙な静寂が漂つている。ここには、一人がじやれ合つ、他愛もない会話しか聞こえてこない。一人は酒を呑み、静男は深く酔つたと感じた。

「わたしは静男さんが好き。お義兄さんはわたしのもの」

祈祷師が呪文を唱えるように小ちくづぶやき、盃に酒を満たす春代。

静男はグイと呑んだ。冷めた辛口の酒が、たやすく喉を通り胃に染み込む。酒の注ぎ方が変化したことに、静男は気が付かなかつた。電話のベルが鳴つている、静男には夢の中の出来事のように思えた。

「電話よ、出てもいい？」

「ああ、お願ひ」

こたつから立とうとしたその時、春代のスカートが乱れた。あらわになつた太股が薄暗闇の中で、青白く妖しく光る。

静男はその美しさに言葉を失つた。

露出した脚を隠すでもなく、春代は無表情に静男の顔色をつかがう。注意深くはあるが、大胆に躰をよじつた。まるで、静男という男がどのように反応するか、試すかのようであつた。

「はい、上柳です」

しばらくして、春代は急かされるようにして、受話器を上げた。

「まあ、お春なの。あなた、なんでそこにいるの」

「あの。そうだ、お義兄さんにお皿のおかずを届けに来たの」「なんでもいいわ、用が済んだらすぐに帰りなさい。なにをやってるの、いつたい」

「・・・・」

「静男さんはいるのでしょうか。だして、早く」

「ハイ」

秋子の声は明らかに不機嫌である。春代は青ざめた表情で、「お義兄さん電話よ、おねえちゃんから」と、受話器を差し出した。

「いま、なにしているの」

静男は後ろめたく、慘めな言い訳をした。春代はこたつの上の二ikanを突いているが、その表情は硬い。

「そんなこと、どうでもいいわ。山芋をもらつたの、今夜はどうでいいからしら。あ、ちょっと。それから、帰りは少し遅くなりますから、よろしくね」

静男は「わかつた、氣を付けてね」と、ありきたりの返事をして、電話を置いた。

「おねえちゃん、怒つていた?」

「いや、いつもあんな風だよ。気にしなくてもいい」

静男は小さくため息を吐くと、こたつに戻つた。

小さな声ではあつたが「痛い」と、春代が悲鳴を上げた。こたつに入るとき、静男が春代の足を蹴つてしまつたのだ。

「あ、ごめん。痛かった？」

静男は慌ててこたつの中に手をいれる。春代の太股が、意外と近くにあった。

静男の手が、春代の太股のつけ根付近に触れる。

「ダメ」

春代は両手で力いっぱい、静男の手を上から押さえつけた。そこでふたりの動きが止まった。

春代の手が汗ばむ。静男が男の本性をむき出しにしようとしたその瞬間、春代は静男の手を払い、逃げた。

静男は部屋の隅に春代を追いつめた。春代は抵抗し、荒い息の下で意外なことを言った。

「ちょっとまって。お義兄さんはサチ子って女、知っている？」

静男は、エッと絶句して、硬直した。その隙に、春代は玄関先に逃れた。静男は慌てて後を追つた。

裸足で外に飛び出すと、春代はおもてに佇んでいた。たたず

「お、おはるちゃん」

荒れた息を整えるように、肩で息をしながら春代は言った。

「いいこと教えてあげる。サチ子さんは、うお座の女よ」  
ゆっくり振り向くと、春代は表通りへと歩き出した。そして、彼女の後姿は、夕闇が迫る雑踏の中に消えた。

強い雨はいつの間にか上がり、あたりは冷たい霧雨になっている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5035s/>

---

サチ子の日記

2011年4月28日22時11分発行